みどりの ニュースレター

21世紀 地球を、地域を、生活を、
持続可能な豊かさに

8
2007
No.171

特集： STOP 温暖化　待ったなし！
環境市民のパートナーシップ活動からの提案

特定非営利活動法人
環境市民
Citizens Environmental Foundation - since 1992 -
http://www.kankyoshimin.org

¥200

収益の一部は環境市民の活動資金として使わせていただきます。なお、会員には毎月無料配布しています。

みどりのニュースレター

No.171
2007年 8月号

今月の表紙……

環境市民が策定に携わった自治体の環境基本計画書の表紙、環境のまちづくり人材養成講座の写真をちりばめました。環境市民のパートナーシップ活動は持続可能な地域社会の実現に向かってこれからもすすみ続けます。

コレため！

コレ、ためしてみました。

毎月エコロジカルなライフスタイル・グッズを
スタッフが体をはって実践レポートします！

File 25

夏バテも何のその !?
～天然の力で夏も元気に～

（文／ニュースレター編集部　久保 友美）

８月は、夏真っ盛り。海水浴やキャンプ、旅行など、イベントも目白押し！　夏を満喫するためには体が資本です。しかし、夏バテ気味で食欲が……という方もこの時期に少なからずいるのでは。そんな人におすすめしたいのが「昆布酢」。100ml の米酢（もしくは穀物酢など）に 10g の昆布を 1cm 幅に切って、1 時間つけておけば出来上がり※1 と、とても簡単♪「だし」というと、作るのが難しそうなイメージがあって、市販されているだしを使うことも多いですが、昆布酢だったら簡単だし、何といっても天然の旨み♪　漬け終わった昆布は取り除き、冷蔵庫で約 2 週間保存可能。昆布の旨みが出て、まろやかな味になり、お料理にも使いやすくなります。私は、早速きゅうりの酢の物を作ってみました。鼻につんと来る酢独特のにおいはなく、ほんのり昆布の風味が。それにきゅうりは夏が旬のお野菜。きゅうりのみずみずしさと昆布酢のさっぱりさが相まって食も進みます。

また昆布酢は調味料とも相性がよく、いろいろなバリエーションが楽しめます。例えば、三杯酢。昆布酢：大さじ 3、醤油：大さじ 1、砂糖：小さじ 2 で出来上がり。大根おろしやおひたしに合いますよ！

酢はたださっぱりしているだけでなく、いろいろな効用があります。その一つが、血圧やコレステロールの抑制効果。他にも、栄養吸収補助効果などが挙げられます。カルシウムなどの吸収率の悪いビタミン、ミネラルを酢と一緒に摂取すると、ビタミン、ミネラル類の吸収を促進する効果が認められています。美味しいだけじゃなくて、体にもいい。1 粒で 2 度美味しいキャラメルのような昆布酢で、この夏も乗り切りましょう！

※ 1……4 人分の分量です。

CONTENTS

コレため！
夏バテも何のその !?　～天然の力で夏も元気に～ …02

特集：STOP 温暖化 待ったなし！ 環境市民のパートナーシップ活動からの提案 …03-08

みんなでエコろう！ 行事案内
旬のぷちメモ・ミーティングカレンダー・講演のご案内 …09-10

とれたて！ 環境市民
持続可能な社会実現に向け意識を共有／社員総会を開催 …11
京都議定書第一約束期間直前　ニュースレター編集部発！ STOP 温暖化 待ったなし！　シリーズはじめます …12

地球のなかま
第 20 回　その 2　消える極地…13

みどりの瓦版
データで見る環境市民
法人会員紹介
環境クイズ
みどりのお便り
SKIP の！エコファイター劇場
今月のありがとう
新入会員インタビュー・新入会員・寄付 …14

1/ 環境市民
内田 洋子さん …15

NEWS LETTER FEATURED CEF

特集：STOP 温暖化 待ったなし！
環境市民のパートナーシップ活動からの提案

（文 / ニュースレター編集部　久保 友美）

京都議定書第一約束期間も目前に迫り、温暖化防止対策は待ったなしの状況。一方、政府は根本的な解決策を打ち出せないでいます。1992 年の国連環境開発会議で採択された行動計画「アジェンダ 21」でも示された、地域からのパートナーシップによる環境のまちづくりを広めることができれば、地球温暖化防止ひいては持続可能な地域社会の実現は可能なはず。

本号では行政とのパートナーシップ、次号では企業とのパートナーシップについて取り上げ、環境市民としてのパートナーシップの経験やその考え方をまとめ、机上の空論ではない「社会を変えるパートナーシップ」のあり方について伝えていきます。

なぜ、パートナーシップ？

パートナーシップに期待されているもの。それは、「シナジー（相乗効果）」。市民、行政、企業セクターの三者が環境問題の解決に向けて各々「1」の活動を行った場合、社会全体としての成果は 1+1+1 ＝ 3 となります。これでは単なる役割分担に過ぎません。

パートナーシップは、互いの特性を生かし、目的に向かって活動を分担するのはもちろんのこと、分担を超えた協働によって、大きな相乗効果を得ることを目的としています。大きな相乗効果によって社会的課題を変える力にしていきたいという思いがあるからこそ、パートナーシップを行うのです。

パートナーシップの条件とは？

パートナーシップという言葉がよく使われるようになった一方で、行政が NPO へ事業を委託すること自体がパートナーシップであるかのような誤解も生まれています。次の５条件がそろってパートナーシップとなります。

1．違いを生かす

パートナーシップを組むということは、パートナーである各主体の特性を生かすということです。同じ特性を持つパートナーであれば、大きな相乗効果は生み出されません。

2．対等であること

各主体が主体的に行動することがパートナーシップの原点。そのためには対等に参画し、その活動の目的と責任も自ら認識できなければなりません。対等性は主体性を引き出すキーとなります。

3．活動目的の合意と共有化

パートナーシップを組む目的を各主体で合意をしておかないとうまくいきません。きちんと各主体で協議をし、相互理解を深めることが必要です。

4．緊張感のある関係であること

パートナーシップは団体間の関係ですが、実際に活動をするのは個人であり、人間同士の信頼感は活動にプラスの効果をもたらします。ただ、馴れ合いの関係になってしまうと、活動自体へも影響を及ぼします。

5．手段、方法、スタイルの相互理解

パートナーシップは相互理解に基づくもの。各セクターが情報提供を行い、手段、方法、スタイルの相互理解を深めることで、信頼関係を構築していかなければなりません。

環境市民と行政のパートナーシップにはどのようなものがあるの？

環境市民は社会を変える力をパートナーシップによって創りだすため、数々のパートナーシップ活動に取り組んできました。その多くは受託事業として取り組んできましたが、あくまで環境市民は下請けではなく、「言うべきことを言う」スタンスを貫いてきました。中には、どうしても折り合いがつかず、受託を取りやめたこともあります。

住民と行政の橋渡し役として、あるいは生活者の視点を持ったアドバイザーとして、地域での実践経験を生かしたパートナーシップ活動に取り組んできました。これまで関わってきたのは、自治体の環境基本計画・ローカルアジェンダ 21 策定コーディネート※1 や、自治体や公益法人からの委託による「環境活動リーダー養成講座」、「地球温暖化防止推進員養成講座」などの企画運営など様々。環境問題の解決に向けて、環境市民は行政とさまざまなスタイルでパートナーシップを実践しています。

※1
京都府長岡京市、岡山県津山市、京都府福知山市、愛知県碧南市、大阪府吹田市、兵庫県明石市、愛知県岡崎市（策定中）、滋賀県野洲市、奈良県生駒市（策定中）

鼎談　ここまできた　環境市民のパートナーシップ　持続可能な社会への展望

最近よく耳にする「パートナーシップ」。しかし、言葉だけが一人歩きして、本来の目的やあるべき方法を見失っているようにも感じます。環境市民は1992年の設立以来、パートナーシップを持続可能で豊かな社会への変革の重要な手法として実践してきました。環境市民のパートナーシップ活動に深く関わり経験を積んできたメンバー3人が、環境市民のパートナーシップ活動を振り返り、未来に向けて議論しました。

（聞き手：ニュースレター編集部　風岡 宗人）

――これまで環境市民は国内でも先駆的な自治体とのパートナーシップ活動に取り組んできました。今思い返しての率直な感想を。

堀：まず「日本はかわってきた」と感じている。

環境市民の発足した当時（1992年）、行政主催の市民向け環境講演会の講師は学識者ばかりで、NGOが担うなど想像できなかった。1997年、ある自治体から市民向け連続講座の企画依頼があったときも、高名な学識者を講師として呼べることがウリだった。企画料というものは新鮮だったが、やっているうちに疑問が湧いてきた。偉い先生の話と聞き手に乖離がある。聞き手に、もっと展望が持てて、「自分たちにもできる」と思える話を我々なら伝えることができると思うようになった。

さらに参加者とともに理解を深めていく「ワークショップ」という手法があることを知った。環境市民が地球環境基金の助成を受けて開発した「買い物ゲーム[※1]」は代表的なオリジナルワークショップとなった。進行の工夫や「気づき」の引き出し方など、ワークショップは講演より格段に違う難しさがあったが、それはこちらの成長の糧にもなった。

――環境市民のパートナーシップ活動に関わることになったきっかけは。

下村：「住民参画のためのコーディネート」をNGOが仕事としてするという感動が私のスタートだった。

住民参画をサポートするために自分ができることは何なのかを考えていた。福井県武生市（現越前市）の「街並みを活かした環境まちづくり計画」策定コーディネートが初めての経験。当時の三木武生市長が枚本代表の講演に感銘をうけて環境市民とのつき合いがはじまった。

1997年に環境市民のエコシティー研究会が「ローカル・アジェンダ」の調査でドイツに行った際、三木市長も同行。ドイツでは、行政はまちづくり、都市計画、環境保全などの分野で情報開示を徹底してやっていた。住民はその情報を受けて施策に参画できた。そのころ日本で私が知っている行政への関わり方は反対運動しかなかった。住民が計画づくりに関われるというのがびっくりだった。行政と住民の間に入っているNGOがいることも知った。しかもお金をもらって（笑）。すごく感動と驚きを感じたことを覚えている。日本でもいつか実現したいと。

すでに、本格的な住民参画によるエコシティーづくりを枚本代表が市長に話を持ちかけていた。まずは、地元の環境活動をしている団体に集まってもらい話し合えるラウンドフォーラムをつくろうとしたが一筋縄ではない。市内の住民団体の状況把握も一苦労だった。

住民から「何の得があって来たんだろう」と不思議に思われた。「社会的な仕組みづくりをしたい」といっても反応が薄い。ほんとうに心通じあう日がくるんだろうか……という日々が続いた。

主体的に動く住民を育てるための連続講座「エコシティ講座」を開催することになり、環境市民が黒子でコーディネートした。この講座を通して住民自らが企画して開催するようになった。そして地元の環境団体同士や行政、環境市民とそれぞれの理解が深まり、計画策定での住民参画につなげることができた。計画策定事業までは、みんな費用は持ち出しで武生まで通っていた。

永橋：私は縁あって2001年に岡山県津山市の環境基本計画[※2]策定コーディネートにスタッフとして呼ばれたのが始まり。環境市民に関わる以前から、「参加のまちづくり」、いわゆるエンパワーメントやアドボカシー・プランニング[※3]に取り組んできた。最初の10年は「行政は敵」だった。一方で、住民の中でも利害関係はあって一枚岩ではなく、みんなの思いを重ね合わせることでファシリテートの技術を磨いてきた。

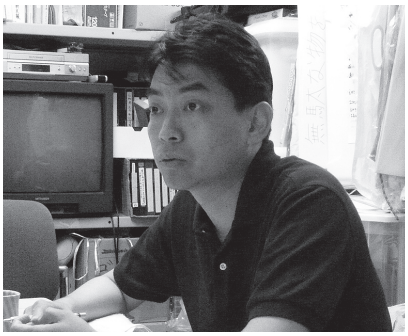
当時、行政と市民とNGOのパートナーシップという言葉はなかった。それを思うと当時と比べて日本における参加のシステムが変わってきたという印象を受ける。例えば特定の公園を住民参画で作るというのが10年前。そこからもっと大きなシステムを住民参画でつくっていくことができるようになってきた。

パートナーシップの相乗効果の説明でよく使われる「1+1≧3」は成果だけが大きくなるんじゃなく、「2+2≧4、3+3≧6」と関わる主体自体が成長していくんだな、とパートナーシップのシナジー効果を実感している。

――パートナーシップをめぐる社会状況は以前から変わってきているのでしょうか。

下村：環境市民をパートナーにしようと決意した最初の自治体は勇気があったと思う。自治体は前例がないとやらない。それをあえてやってみようと思った岡山県津山市はすごい。

行政が「協働」という言葉を使いはじめた頃、私たちの意味するものとはズレがあった。行政のいう協働は単なる役割分担にとどまっていることが多かった。当時に比べれば本当のパートナーシップを考えないと、という意識のある行政職員も生まれてきたのではと思う。



永橋：「NGOが計画策定？　コンサルタントとどうちがうのか」と問われることがある。大きく違う。ややもすると行政とコンサルタントとは完全な上下関係。NGOは行政に対しても市民に対しても対等な関係を保つ。最終的に地域の課題を解決する主体はそこに住む人たち。自分たちはあくまでそれをサポートする触媒に過ぎない。

そこで起きる関係性の変化は予想もつかない。丁々発止のやりとりから今までとは違う関係性が生まれる。それがパートナーシップの醍醐味。そのためには対等な関係が必須。コンサルタントの場合は予め役割が上下に固定されているからしんどいと思う。

堀：環境基本計画策定も、続けていくうちに、「環境市民に環境基本計画策定コーディネートを依頼する自治体は、市民参画による策定の大切さをよく理解している」と思い込んでしまっていた。でも実際にはそうでないこともあった。

ただ、そういった経験は今策定中の奈良県生駒市でのコーディネートに生きている。公募策定委員の募集方法、行政の取り組み方など提案し、委員の理解を得ながら策定作業をすすめることができている。

下村：パートナーシップがなかなか思うようにすすまない、という声をよく耳にする。でも考えてみればそんなに簡単にいくはずがない。これがあたりまえ。住民みんながはじめからパートナーシップを理解するのは難しい、みんなが足並みをそろえて変わっていくわけでもない。でもはじめは自分から「やる」と言わなかった人たちが自ら活動の主体に成長していく変化をたくさん見てきた。

――これまでの環境市民の経験を地域から日本を変えていく影響力に育てていくためにどうすればいいのでしょう。

下村：自治体は一応パートナーシップという言葉を使うが、本質的には理解されていないと思う。

本当のパートナーシップとは何かをどうにかして表現して伝えていく必要があるのではないか。環境問題は時間的な制約がある。正直焦りがある。日本の環境首都コンテストの回答資料として提出された自治体の「協働マニュアル」で、自治体が市民団体の行事を「後援」することがパートナーシップと書いてあり、唖然とした。頭で理解しているが、実際に地域に適用しようとすると「？」になるのが実情ではないか。

相乗効果が得られなければパートナーシップではない。「当たり障りのないところだけ一緒にやる」ではだめ。しかしそういう楽な考え方が流布してきている。それに加えて行政職員は人事異動でまた一から関係づくりが必要になる。結局手間暇かけてやっていくしかないのに……。

ひとつ「これだ」というモデルが発信できればと思う。「こんなまち、こんなひと、こんな職員」というモデルを示すことができれば、社会の注目を集めるのではないか。

永橋：広げていくことも大切だが、パートナーシップを理解するには「人が変わり、関係が変わる」というプロセスを経験することが大切。結局やる気づくり、信頼関係づくりなどのプロセスを踏んでいくしかない。だから計画策定には時間がかかる。

行政職員の「住民にがんばってもらいたい。でもなかなか参加してくれない」という愚痴をよく耳にする。計画策定に参加する住民は、日々の生活と策定委員という二足の草鞋（わらじ）を履いている。これは想像以上に大変なこと。市民が参加してくれないというのなら、その職員には一市民として活動したことがあるのかを問いたい。行政職員としての自分の枠を超えるという課題をつきつけられる。部署間の壁、上司との関係を超えることも求められる。いい働き方をしている人は必ず「越境」している。職員は異動してしまうが、越境の作法が身に付いた人は、パートナーシップ活動で得た喜びや生き甲斐を自ら手放しはしないと思う。

堀：ノウハウは持っているだけでは必ず陳腐化する。これまで培ってきたノウハウを具体的に社会に提言していく、研修に盛り込むなど、効果的に広げていくことが必要では。

下村：パートナーシップのノウハウを陳腐化させないためには、その人のなかでノウハウを成長させ続けなければならない。そういう意味では、環境市民が環境を大切にしたまちづくりのコーディネーターを養成するために毎年実施している「協働コーディネーター養成講座」は、地域に本物のパートナーシップを広めるためにやっていると言えるのではないか。

堀：現在1800ある市区町村の大多数の計画はコンサルタントが関わっているはず。その意味ではコンサルタントを変える意味はあるだろうか。

永橋：コンサルタントよりも前に、まずは自治体職員のコーディネート能力を上げる講座が必要かもしれない。上下関係が固定されがちで儲けも出さなければならないコンサルタントが、時間も手間もかかる本当のパートナーシップをコーディネートできるかどうか。

下村：「儲けないコンサル」が必要（笑）。職員への働きかけも必要。その結果、理解して変わるのは60人中一人か二人かもしれない。でもその人たちが違うセクターに対してそれぞれの立場でちゃんとしたパートナーシップに取り組めば社会は変わっていくのではないか。

永橋：なるほど、NGOとコンサルタントとのパートナーシップも視野に入るかもしれない。既に碧南市の計画策定※4では経験している。お互いの得意技を重ねあわせることでモデル自治体づくりを強力にサポートできる可能性も開いておかないといけない。いろいろな主体が登場するパートナーシップのプロセスは、大変なこともたくさんあるけど、それぞれの主体が持つ「美しき意志」に焦点を当てて顕在化させていく。よいところを引き出していくことが大切。

下村：いいところをふやしていくことでだめなところを減らしていく。ここまで言葉が通じないのかと思うこともあるが、でも結局相手を真摯に理解することしかないと思う。これはパートナーシップに限らず現代社会全般に欠けていることだ。

堀：全国のどこの自治体でもこんなプロセスで計画が作られていくこと、環境市民がそこに影響力を発揮していくことが私の夢。しかし環境市民のやってきた実績をどうやって広めていくかが課題。今のやり方だけでは社会を変えるには限界がある。でも地域内で複数のモデルが出てきたら一気に変わるという予感がしている。

また、今現在こうやったら計画は動くというモデルやノウハウはまだない。まだ希望のレベル。もう一段階上のものができないか。私たちが関わったら推進組織が動く、そう胸を張って言えたら大したものだと思う。その意味で環境市民の地域での実践活動をもっと活用していきたい。

下村：地域の人たちが夢を思い描く、そんな機会をつくっていきたい。

今現在のことも大事。私がこれまで見てきたイキイキしているまちの人はみんな夢を描くことができる。夢を描くだけでなく「本当にそれやろうよ」と動きだしたところもある。日本という国そのものの制度の話になるが、夢を描ける時間、仲間がある社会をつくっていきたい。計画だけが全てではない。最初は夢でもいいから、語れる場、それを実行するだけの余裕がある社会がつくれないかな。

そのためにはひとつずつ、プロセスを重視する民主主義をつくりながらこつこつとやっていくしかない。

注）

※1　買い物ゲーム……実際に商品にさわって選ぶ体験とグループでの討論を通じて、グリーンコンシューマーの知識と方法を身に付けるワークショッププログラム。

※2　環境基本計画と策定コーディネート……自治体の環境保全に関する基本的な事柄を定めた行政計画。環境市民は、自治体が住民参加でこの計画を策定する際、住民と行政の橋渡し役を担っている。

※3　アドボカシー・プランニング……まちづくりに関わる様々な立場の個人・団体の主体的な提案を促し、合意形成を支援する手法。

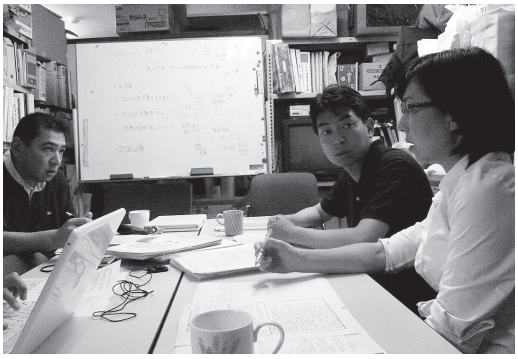
※4　碧南市の環境基本計画は市民、市、UFJ 総合研究（当時）、環境市民のコラボレーションで策定された。

●鼎談者紹介 ……

下村 委津子さん　環境市民理事、環境カウンセラー。環境まちづくり関連の番組や環境ビデオへの出演・制作に携わる。環境首都コンテスト全国ネットワークメンバー。「びんビールで行こうキャンペーン」の発案者でネコとビールをこよなく愛す。

堀 孝弘さん　環境市民理事兼事務局長、京都グリーン購入ネットワーク事務局長、立命館大学産業社会学、経済学部非常勤講師、佛教大学通信教育部講師、京都市廃棄物減量等審議会委員、京都市ごみ減量推進会議理事を務める。

永橋 為介さん　博士（農学、京都大学）。カリフォルニア大学バークレー校客員研究員を経てコミュニティー・デザイン・センター副代表理事。環境市民パートナーシップ活動にコアとして関わり続ける。来年度から小学生となる愛娘の保育所の送り迎えも今年度いっぱい。家の近くでのザリガニ釣りに最近はまっている。



事例紹介 パートナーシップを育む仕組みづくり 北海道ニセコ町の取り組みから

（文：ニュースレター編集部　風岡 宗人）

北海道西部にある大自然と調和した人口4,600人のまち、ニセコ町。この町は徹底した情報公開と住民参画の仕組みづくりを通してパートナーシップを推進してきました。

本質的なパートナーシップを組むための前提として、住民がまちづくりに参画する力をつけていくこと（エンパワーメント）が必要です。そのためには多くの情報と財源を持つ行政が、住民に対して情報を最大限公開し、予算策定にも住民が参画できる仕組みづくりが求められます。

○全国に先駆け住民自治を制度的に保障

ニセコ町は全国に先駆け、住民参加で「まちづくり基本条例」（自治基本条例）を制定しました（2001年4月施行）。この条例は「町民と行政との情報の共有」「行政の透明化の確保」「住民主体の行政の実現」をまちづくりの原則として明記しています。第11条には未成年のまちづくりへの参加権も規定され、実際にまちづくり委員会を組織して町の課題探し、町長や町職員との議論を通して事業化されたものもあります。この条例が国内自治体の自治基本条例のモデルにもなっています。一般的に条例は一度制定されたら改正は困難ですが、この条例は4年に1度見直しすることが定められ、実践されています。またこれらの規定が単なるスローガンではなく、具体的な施策として展開されています。

子ども会議の様子

○ 30秒以内に行政文書検索

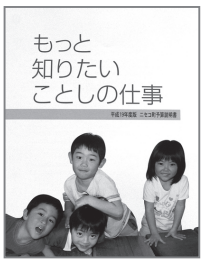
ニセコ町は、行政と住民が同じ情報を持つことを重視し、積極的な情報公開に取り組んできました。情報共有化とコスト削減のため、役場内の文書はだれでも30秒以内に検索が可能な文書のファイリングシステムをつくりました。原則として保管される文書は庁内でひとつのみとし、優先順をつけて文書を整理しているので、職員にとっても使いやすく、住民にとっても文書の公開を請求する際に長時間待たされたりたらい回しにされることがなく、町の情報が身近になりました。

予算検討委員会の様子

○予算への住民参画

住民税1%分（2005年度：100万円）の予算の使い道について住民から事業提案を募集し、全員公募の予算検討委員会が内容を審査、町長に答申します。町長は答申を尊重して予算案を作成、議会の議決を経て予算化されます。予算配分への住民参画は画期的で、町の住民参画への姿勢を示すものであるとともに、住民の「こんなことできたらいいのに」という思いを形にする仕組みと言えます。これまで「絵本の読み聞かせ会」（2005年度：予算7万円）、ニセコ春の音楽彩オリジナルソングコンテスト（2006年度：予算40万円）などの提案が採択、事業化されました。

○予算説明書の全戸配布



予算説明書

自治体の予算は複雑で、その説明も十分ではないため、納税者である住民にとってとっつきにくく参加しにくいものになっています。そこでニセコ町は、予算について住民に知らせる仕組みとして予算の説明書「もっと知りたいことしの仕事」を発行、全戸配布しています。極力行政用語を使わず、図や写真を使い丁寧に説明。都合のよいところだけでなく問題点や課題についてもしっかりと明記。町の総合計画の内容に沿わせることで、施策や事業の目的、内容などに照らした予算の使われ方を示しています。

○環境基本計画の進行管理への住民参画とわかりやすい環境白書

町は、2002年に住民参画で環境基本計画を策定しました。計画の進行管理については、住民主体の評価作業部会をつくり、その年度の進捗状況を点検・評価。年度途中（プロセス評価）と年度後（アウトプット評価）の年2回にわたって行うことでしっかりとした進行管理が可能になるとともに、評価の結果が実際の施策に反映されることで住民が参加を実感することにもつながっています。町の環境施策の進捗状況をまとめた環境白書も、年度ごとの達成度合いを「○△×」などで図示するなど、進捗や成果をわかりやすく表現しています。情報共有の考えから、環境基本計画と環境白書は住民へ全戸配布しています。

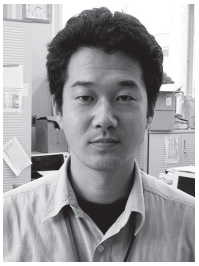
○寄付者が寄付先を指定できる制度

これらの取り組みが町内外からの共感を得、寄付が寄せられています。そこで町は寄付者が望む寄付金の使い道を指定できる仕組みを条例化しました。寄付先は森林資源の維持・保全、自然エネ・省エネ設備整備、自治の醸成及びコミュニティ推進などの5分野で「ニセコ町ふるさとづくり基金」として積み立てられています（7月11日現在で全国から321件、1,603,000円の寄付を受けています）。

このように、ニセコ町は徹底的な情報公開で行政と住民の距離を縮め、町政の様々な段階へ住民が参画する仕組みをつくることで行政と住民の信頼関係を培い、参画する住民も力をつけながら、パートナーシップが育まれる土壌を育てています。その成果もあり、住民とのパートナーシップによる事業も生まれています。ちなみに、ここで紹介した取り組みは特殊なものではなく、どこの自治体でも始められるものばかりです。

参考）
「日本の環境首都コンテスト 先進事例集」、「同 映像版先進事例集 第１集」
Webサイト「わがまち元気」内閣府経済社会総合研究所：
http://www.wagamachigenki.jp/suisho/suzuki_12.htm
ニセコ町公式Webサイト：http://www.town.niseko.hokkaido.jp/

環境市民が２年間にわたり、環境基本計画策定のための市民参画組織コーディネートにかかわった滋賀県野洲市。市の担当として第一線で活躍された橋 元輝さんからメッセージをいただきました。



地域を変えるパートナーシップによる環境基本計画策定

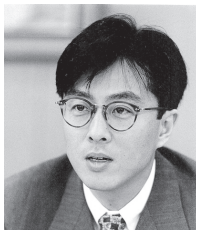
野洲市 環境経済部 環境課　橋 元輝（もとき）さん

野洲市では2005～2006年度と環境市民の協力もいただき、市民と行政のパートナーシップにより環境基本計画を策定しました。この計画は、実践可能な計画となるよう、市民や市民団体、事業者、行政など49人が参加する策定委員会で計画案をつくってきました。

策定前、私は「市民と行政は対等な関係であるべきだ」と頭の中では理解していました。けれども、策定が始まってみると頭の中の理解を越えたことがいろいろと起こってきました。人が多く集まればそれだけ多くの意見が出てくるわけで、たくさん出てくる意見に対し、どう対応すればいいのか、戸惑うことしきりでした。

計画は、めざすべき将来像を示したビジョンとそれを実現するためのプロジェクトが中心です。この４月からプロジェクトを順次実施しています。そして、講演会の開催や山の草刈などともに市民と行政が協働して汗を流しています。協働で推進することで、市民と行政の相互理解が進み、協力する関係が発展する中で徐々に地域を変え始めています。

「環境市民の特徴を活かし、マルチパートナーシップの仕組みの提案を」



白石 克孝
（龍谷大学法学部教授、本会理事）

日本のパートナーシップは、行政からの業務委託や補助金によって進められるケースが多数を占めています。これによって、行政とNPOとの、あるいは行政と事業者との、二者の間でのパートナーシップを典型的なパートナーシップとする思いこみが生まれています。地方自治体の職員をみると、パートナーシップを理解しているのは市民と関わりのある現場を持っている人に限られ、実のところはパートナーシップ抜きで仕事が進められると思っている人も少なくありません。「二者パートナーシップ」にしても、行政が汗をかかないようなケースも多く見られるところです。

二者パートナーシップだけでは地域課題を解決していくパートナーシップとしては不十分で、地方自治体も含めて地域の様々な主体がかかわる「多者（マルチ）パートナーシップ」にしていく必要があります。その実現のためには、マルチパートナーシップを要求するような制度や予算の枠組みを作る必要があります。温室効果ガスの効果的削減、社会的・経済的に困難を抱える地域の再生といった、具体的な課題を解決するために必要な様々なプロジェクトを優先順位をつけて組み合わせ、それら全体に予算を配分する仕組みである「包括補助（交付）金」がもっとも有効な手段です。そしてこの事業計画づくりに多くのパートナーが参加することを求める制度設計にすれば、マルチパートナーシップ型の課題解決の取り組みが急速にひろがっていくというのが、過去十数年の英国の経験です。

地域での実践活動と非営利シンクタンク的な活動をリンクさせて取り組んでいるのが環境市民の特徴です。その特徴を活かし、環境市民がマルチパートナーシップを可能にする制度、枠組みづくりへの提案をしていく必要もあるのではないでしょうか。マルチパートナーシップ型アプローチを得意としてきたのが環境市民だからです。それと同時に、パートナーシップを単なる「手続き」と考えるのではなく、パートナーシップが多様に展開する社会を持続可能な社会の具体的なイメージと考えることも必要でしょう。鼎談にもあったようなパートナーシップ経験を、関わった本人の中だけでなく、言葉として総括し、社会的に発信・共有していくことがこれからの環境市民の課題だと感じています。

パートナーシップは実践の積み重ねと仕組みの両輪があってはじめて社会に根づき、社会を変えていく手法となりえます。日本ではまだ本質的な市民参画やパートナーシップが根付いていません。環境市民は、今後も国内外の先進的な取り組みに学びながら、地域での実践活動とともにパートナーシップ活動、さらにパートナーシップが当たり前になる社会を創るための提案活動にも積極的に取り組んでいきます。（9月号に続く）

☆お知らせ：10月号から生駒市の環境基本計画の策定の様子を数回連続（隔月）でレポートします。お楽しみに！

みんなでエコろう！ 行事案内

問合せ・申込み
環境市民
http://www.kankyoshimin.org
【TEL】 075-211-3521
【FAX】 075-211-3531
【IP 電話】 050-3581-7492
【E-mail】 life@kankyoshimin.org

連続講座　CO2 マイナス60をめざして ～地球温暖化を防ぐ5つの行動提案～

10 年前、京都市で採択された京都議定書の第一約束期間（2008～2012 年）が来年から始まります。しかし、ご存知のように日本の目標（温暖化効果ガスを基準年比マイナス 6%）達成はかなり厳しい状況です。

そのような中、今年 5 月、安部首相は「美しい星 50」と題した演説で、2050 年の世界の二酸化炭素排出量を現在の半分に減らすことを世界共通の目標とするよう提案していく旨を表明しました。しかし、直近の京都議定書の達成については、これまでの「コマメ暮らし」の呼びかけにとどまっています。長期目標（二酸化炭素半減）については巨大技術頼みで、かつ日本の削減目標を表明しないなど、多くの問題を含んでいます。

地球温暖化を食い止めるには気温上昇幅を 2℃未満（二酸化炭素濃度で 475ppm 以下）にとどめる必要があると言われています。そのため、2050 年頃までに「世界の二酸化炭素排出量半減」は必須であり、世界の中でも特に排出量の多い日本が率先して約 60% CO_2 削減する必要があります。そのためには、これまでと違う社会システムが必要です。

この講座は、地球温暖化防止をテーマに、暮らし、経済、子育て、まちづくり（交通含む）、自然など、様々な分野で効果をあげている活動事例や海外の先進事例、第一線の学識者の提言を紹介します。それらによって、「次の社会の展望」を見出すとともに、市民、事業者、行政のより一層の行動を促すことを目的に開催します。

●こんな人におすすめ

環境問題、特に地球温暖化に、ある程度関心をもち、これまでの環境情報に飽き足りなさを感じ、不安やもどかしさを感じている人たち。

《全回共通》

参加費：各回 1,000 円　全回通し参加 4,000 円
　　環境市民会員および学生は各回 500 円　全回 2,000 円
申込み：必要
主　催：環境市民

第1回　地球温暖化を防ぐグリーンコンシューマー ～リサイクルよりリユース～

使い捨て容器を増えるにまかせ、あとはリサイクル！　これでは環境負荷は大きくなるばかり。洗って何度も使うリユース容器をどのように増やしていくか、「ノスタルジー」ではなく具体的な実践活動の報告をします。勇気と確信が得られることでしょう。

と　き ： 9月2日（日）午後1：00から4：30
ところ ： キャンパスプラザ京都　第1会議室
定　員 ： 50人
講　師 ： 太田 航平（NPO法人地域環境研究所ecotone代表）
　　樽井 雅美（One Dish Aide）
　　下村 委津子（環境市民理事　エコパーソナリティー）
　　堀 孝弘（環境市民事務局長、立命館大学産業社会学部経済学部非常勤講師）

第2回　応援しがいのある企業の見極め方 ～市民が勧める企業の温暖化防止～

絶えない企業の不祥事。一方、環境・人権・地域貢献など、社会的責任を強く自覚する企業が増えてきたのも事実。商品購入や投資、就職もそのような企業を対象にしたいもの。応援しがいのある企業をどのように見極めるか。役立つ情報が得られます。

と　き ： 9月9日（日）午後1：00から4：30
ところ ： キャンパスプラザ京都　ホール
定　員 ： 定員80人
講　師 ： 枚本 育生（環境市民代表理事、グリーン購入ネットワーク代表理事）

第3回　子どもたちに贈る未来（子どもたちに贈る未来は大丈夫？） ～子育てと温暖化の深い関係～

誰もが未来世代に素晴らしい環境を残したいと思っています。なのに、社会では子どもを「小さな消費者」として扱っています。その先にどのような未来があるか。ならば私たちに何ができるか。子どもを取り巻く環境と未来への影響について考えましょう。

と　き ： 9月17日（月祝）午後1：00から4：30
ところ ： 京エコロジーセンター　1Fシアター
定　員 ： 80人
講　師 ： 岩城 敏之（キッズいわきぱふ代表）
　　堀 孝弘（第1回参照）

第4回　環境首都からみえる脱温暖化社会 ～ドイツと日本の先進事例から～

交通、まちづくり、エネルギー対策などをおもなテーマに、ドイツと日本の各地で実践されている先進的な環境活動を紹介します。環境を大切にした社会は夢ではないことを感じてもらうことができるでしょう。

と　き ： 9月29日（土）午後1：00から4：30
ところ ： 京エコロジーセンター　1Fシアター
定　員 ： 80人
講　師 ： 白石 克孝（龍谷大学法学部教授）
　　枚本 育生（第2回参照）

第5回　自然が感じている温暖化の真実 ～野外植物調査で実態を知る～

植物への温暖化の影響や生態系全体への影響について、植物の専門家から野外実習で学ぶとともに、今後各自が実践できる簡単な調査方法を学びます。自然の不思議や素晴らしさを感じてもらうとともに、私たちの暮らしとの関係を考え直します。

と　き ： 10月14日（日）午前10：00から午後4：00
ところ ： 京都御苑（予定）
定　員 ： 40人
講　師 ： 片山 雅男（夙川学院短期大学准教授）

第6回

まとめ　CO_2マイナス60が当たり前の社会に
～温暖化防止は対策ではなく戦略が必要～

最終回は、これまでの提供情報のまとめをするとともに、環境経済学の第一人者から、環境と経済が両立し、かつ、この講座で提唱している「CO_2 マイナス 60%」が当り前に実現できる社会への転換を展望した報告をします。さぁ、いっしょに行動しましょう。

と　き ： 10月20日（土）午後1：00から4：30
ところ ： キャンパスプラザ京都　第１会議室
定　員 ： 50人
講　師 ： 植田 和弘（京都大学経済学研究科教授）

環境首都コンテスト勉強会・入門編 ～ここから始まる！環境首都への第一歩～

今年で７回目を迎える日本の環境首都コンテスト（首都コン）。このコンテストのボランティアスタッフを養成するための講座です。環境、まちづくりに関心のある方ならどなたでも参加できます。

《全回共通》

参加費 ： 各回500円（往復交通費、食事代等は実費負担）
申込み ： 全回必要
主　催 ： 環境市民

●第1回　水郷のまちを歩きひとと交流しよう

首都コンに参加した、景観分野で表彰も受けた近江八幡市を歩きます。地元で幅広く活動される木ノ切さんのお話も伺います。

と　き：8月25日（土）午前10：00から午後3：00頃
講　師：木ノ切（きのきり） 英雄さん（水と緑の市民環境会議会長）
定　員：10人
※プログラムの詳細は申込者にご連絡します。

●第2回　座談会　自治体で働く方のお話を聴こう

首都コンスタッフとして活躍したメンバーが今年度から自治体職員として働き始めました。首都コンスタッフの経験と自治体現場についてお話を伺い、意見交換します。

と　き ： 9月16日（日）午後7：00から9：00
会　場 ： キャンパスプラザ京都　第1演習室
話　者 ： 荒川 萌さん（兵庫県尼崎市職員）
大塚 千夏さん（長野県飯田市職員）
濱 和宏さん（京都市職員）
定　員 ： 20人

●第3回　最新調査報告　ドイツの環境首都に学ぼう

昨年 10 月にドイツの環境首都を視察した首都コンメンバーによる、映像を豊富に用いた調査報告です。

と　き ： 調整中
ところ ： 調整中
講　師 ： 大西 康史さん（未来の子 事務局長）
※詳しくはお問い合わせください。

※入門編の後、実践編としてコンテストの質問票をテキストにした勉強会も開催します。

エコ木工教室で好きなものを作ろう！

杉、檜の端材で、例えばポスト、小鳥の巣箱、ブックスタンド、踏み台、その他をトンカチの得意な方も苦手な方も作ってみませんか？　木工に強いベテランスタッフがいますので安心です。

と　き ： 8月19日（日）午前11：00から午後4：00（弁当持参）
ところ ： フジノ工務店　京北作業所
京都市右京区京北辻町権現ノ元2－1
対　象 ： どなたでも（但し、小学生は保護者同伴）
定　員 ： 20人
参加費 ： 1,000円（作品は持ち帰っていただけます）
集　合 ： 阪急四条大宮駅　南側マクドナルド前の公園に午前10:00に集合 。集合場所から作業所まで車で送迎します。

申込み：必要（8月12日締め切り）
企　画：自然住宅研究会

問合せ・申込み
環境市民 東海事務所
http://www.kankyoshimin.org/tokai
【TEL/FAX】 052-521-0095
【IP 電話】 050-3604-6182
【E-mail】tokai@kankyoshimin.org

環境市民サマーキャンプ2007（東海エリア会員向けの交流会vol.2）

今月は「環境市民 nagoya cafe」「ぽっとらっくぱーてぃ」を一緒に交流会として、ご家族で楽しめる企画を考えています。森あるき。どえりゃあ～きれいな夕陽。そして手が届く？　星空の下でシュラフにくるまって夢をみませんか？
好評のナイトツアーもおこなう予定です。テント、シュラフ、食器など持参してください。

と　き ： 8月25日（土）、26日（日）1泊2日
ところ ： 長野県王滝村
参加費 ： 3,000円（宿泊飲食含む）
持ち物 ： テント・シュラフ・食器など
申込み ： 必要

□ちょっとお得な「ぷち情報」

毎月３日に翌月の行事情報などをブログに掲載しております。ウェブサイトと合わせてご覧ください。
詳　細：http://kankyoshimin.seesaa.net/

□東海事務所の活動をパネル展示します。

「第 12 回　水シンポジウム in あいち」で、東海事務所の活動「よみがえれ！　油ヶ渕プロジェクトチーム」の紹介をパネル展示します。シンポジウムの参加申込は７月 30 日までですが、パネル展示は出入り自由でご覧になれます。

と　き ： 8月9日（木）午前9：20から午後5：00
ところ ： 名古屋国際会議場（センチュリーホール＆２号館）
問合せ ： 愛知県河川課（Tel：052-953-4321）

シンポジウムURL
http://www2.convention.co.jp/water-sympo12/

NEWS!

～環境市民の今、そしてこれからの活動をお知らせします～

とれたて！環境市民

持続可能な社会実現に向け意識を共有 —社員総会を開催—

「10年前に盛り上がっていた地球温暖化問題が今、また盛り上がってきている」。枚本代表のこの言葉で第６回通常社員総会が開会されました。その言葉通り、総会当日の6月17日は地球温暖化を体感させるような蒸し暑さで、まだ6月なのに真夏を思わせる陽気となりました。

総会は約40人の社員やボランティアが集まり、終始アットホームで和やかな雰囲気で催されました。第1部に通常社員総会、第2部に枚本代表の講演、第3部に2007年度プロジェクト紹介と続き、最後に交流会が行われました。会場は支配人の方が環境市民の会員であるというコープ.イン.京都。まず、通常社員総会では四つの議案が満場一致で採択され、続いて2007年度の事業計画が報告されました。

次に、枚本代表の講演。「脱地球温暖化の戦略—NGO、市民のイニシアティブ」という題で、前半に地球温暖化の現状、後半に地球温暖化防止のための日本のとるべき戦略について話がありました。枚本代表の柔和な笑顔と裏腹に、雪のなくなったアルプスの山々や白化現象の起きたモルディブのサンゴ礁などスライドに映される数々の写真によって地球温暖化による被害の現実が生々しく描写され、その切迫感を顕わにしていました。それから、脱地球温暖化のために日本がとるべき三つの戦略、自然エネルギーをもっと普及させ、自動車をなるべく使わないような交通のシステムを作り出し、環境に優しい商品が市場に出回るようにすべきであるという話をしました。

そして、2007年度のプロジェクト紹介。環境市民が京都三条ラジオカフェと協働で放送しているコミュニティＦＭの番組、「エコまちライフ」の音楽と雰囲気で多くのプロジェクトが紹介されました。今年で15周年を迎える環境市民にはたくさんのプロジェクトがあります。第7回を数える「日本の環境首都コンテスト」など何年も行われ実績のあるプロジェクトもあれば、今まさに活動を始めた「モルディブ・プロジェクト」や「SHOPPING for a BETTER WORLD 日本版作成」のような新プロジェクトもあります。モルディブ・プロジェクトは、モルディブに再生可能エネルギーを普及させようとするプロジェクトで、SHOPPING for a BETTER WORLD 日本版作成プロジェクトは本当の社会的責任を果たしている企業を評価しようというプロジェクトです。

この総会を通して、環境市民のメンバーは口々に「社会を変える」といいました。「環境に配慮した、持続可能な社会」、そういう社会へ自分たちが変えていく、自分たちがその社会の仕組みを作っていく。この大きな意志を多くの人が共有し、かつ実行する。この「人」の強さと、人と人との「つながり」で社会を変えていきたいです。

（文/ニュースレター編集部　東 広之）

明るく楽しくプロジェクト紹介をしてくれたラジオチームのメンバー。

2006年度の活動を報告する壁新聞に見入る参加者。

テーブルの真ん中に月桂樹の葉をあしらって。テーブルコーディネートもナチュラルに。

総会で大好評！ 水無月の作り方

総会終了後の交流会のためにつくっていただいた「水無月」という、ういろうに似た京都の伝統的なお菓子のレシピを特別公開。ぜひつくってみてくださいね。

＜材料＞

A　・上新粉 30グラム・薄力粉 70グラム・砂糖 50グラム、
　　・甘納豆 110グラム

B　・グリーンティー 30グラム
　　（抹茶20グラム　砂糖10グラムでも代用可能）
　　・お湯 100cc・水 200cc
　　（グリーンティーは、お湯で先によく溶いてから水を合わせる）

■作り方

1）耐熱容器にラップを敷く
2）底に甘納豆を敷きつめる。
3）ボールにAを入れて泡だて器でよく混ぜ、Bを少しずつ加えて混ぜ、容器にゆっくり注ぐ。
4）約25分蒸す。

（レンジの場合は上からラップをかけて強で約5分。ラップをはずして約2分、加熱。蒸す方が電子レンジよりエコなので、できる限り蒸し器の使用をおすすめします）

※容器は、耐熱性のあるものを使用する。なければ、丼鉢でも代用可能。
※グリーンティーの量は目安。ティースプーン１杯ぐらいでも大丈夫。

（レシピ提供：会員 細井 さおりさん）

京都議定書
第一約束期間
直前

ニュースレター編集部発！

STOP 温暖化 待ったなし！　シリーズはじめます

2008年1月からはいよいよ京都議定書第一約束期間がスタートします。しかし、日本は抜本的な温暖化防止政策を打ち出すことができず、6%の削減目標の達成さえ危ぶまれています。そこで、環境市民では、「みどりのニュースレター」を通して温暖化を止めるための課題と提案を「市民の視点」から発信します。

ぜひ、ニュースレターをみなさんのご家庭の、職場の、学校の、地域の、温暖化防止活動に活用してください。

□地球のなかま　京都議定書第一約束期間開始目前　特別編

生き物の不思議な生態について伝える「地球のなかま」も7月から、温暖化による生き物への影響を伝えます。私たち人間の生活が生き物を絶滅の危機に追い込んでいる現状をもう一度考えてみませんか。

2007年　特集　テーマ予定
8月　行政とのパートナーシップ
9月　企業とのパートナーシップ
10月　エネルギーの地産地消を考える
11月　環境市民が考える環境共育とは
12月　温暖化問題　NGOに何ができるか？

地球のなかま　テーマ予定
7月　環境汚染と生き物
8月　消える極地
9月　大地が乾く
10月　森が泣く
11月　増える外来種
12月　人の手によって残された動物たち

企業で、地域で、NPOで　みどりのニュースレターを定期購読しませんか

団体であれば５部以上からニュースレターの定期購読ができます。社内での環境の取り組みのモチベーションアップに、地域やNPOでの活動の参考にご活用ください。お申し込みは京都事務所まで。

年間購読料金（送料、税込み）	
5部　15,000円 / 年	15部　40,000円 / 年
10部　27,000円 / 年	20部　50,000円 / 年

※会員には毎月送付しています。ニュースレター定期購読の対象は団体のみ５部以上から受付。20部以上はお問い合わせください。

ぷちの句メモ

あなたの心に季節の窓を。旬の話題と暮らし方のヒントをお届けします。

● VOL・26 ●「浴衣（ゆかた）」

縁日、花火大会。楽しかったことを思い出させてくれる浴衣は、木綿地の風通しのよさと高い吸水性から、着てみると意外と涼しいことに気づきます。

また、腰紐や帯の締め方の強度を調節するといった、着付けの工夫により、体型を問わず誰でも着られることから、親から子へと受け継がれ、最後には、雑巾やおしめとして使われてきました。ものを大事にする心が生んだ知恵。思い出の浴衣と、長いお付き合いしてみませんか。

（ニュースレター編集部／藤岡 洋貴）

ミーティングカレンダー

'07 8月

8月2日(木)　ニュースレター編集部　午後6:30から
4日(土)　自転車チームちゃり民　午後
4日(土)　自然住宅研究会　午後7:00から
6日(月)　ニュースレター編集部　編集日　午後6:30から
13日(月)～16日(木)　京都事務所夏休み
22日(水)　ニュースレター編集部　校正日
29日(水)　ニュースレター編集部　発送日

●環境市民によるエコ地蔵盆が行われます（一般参加はできません）
18日(土) 京都市北区薬師山町
19日(日) 京都市中京区天守町、三本木五丁目町

講演のご案内

全国に講演に出かけています。お近くに来た際にはご参加ください。　※詳しくは京都事務局へお問い合わせ下さい。

■8月11日(土)　エコロジカルな遊びと体験/西宮市
※↓一般参加はできませんが下記の講座にも講師を派遣しています。
□8月25日(土)　地球温暖化防止/山形市

地球のなかま

先月、１時間で四つの種が絶滅していると書きました。それよりも早くなっているという説もあるほどです。地球の寿命は息もたえだえ、大地ごと姿を変えつつある極地はまさに命たえだえ、なのです。
第２回は、危機に瀕している極地の状況をお伝えします。

第 20 回

京都議定書第一約束期間開始目前特別編

その2　消える極地

文／ ニュースレター編集部　千葉 有紀子

●北極異変

２００６年８月、ある新聞記事に愕然としました。この記事がきっかけとなって、この６回の連載を私が考えるようになったといっても過言ではないでしょう。それくらいショックを受けたその記事には、「溶けゆく大地」というタイトルがついていました。

米露国境のベーリング海峡に近い島シシュマレフ（アラスカ州に属する）が大変なことになっています。温暖化によって海が凍る期間が短くなったために、押し寄せる高波が陸の永久凍土を削り、溶かしてしまうのです。氷でささえられていた大地が海に飲み込まれていく形で海岸浸食が進み、家屋の倒壊が相次いでいます。そのため、村ごとアラスカ本土へ移住することが、住民投票で決まったそうです。それは、１つの集落が消えるということを意味します。

先住民のイヌピアット・エスキモーを中心に約６００人が暮らしているこのシシュマレフ村は、写真家の故星野道夫さんによって有名になった村です。 学生だった星野さんは、ある写真集でこの村に魅せられ、手紙を出します。あきらめかけたある日、手紙が来るのです。「どうかおいでください」。１９７３年のことです。この村に滞在したことがきっかけとなって、星野さんは写真家への道を歩みだし、アラスカの大自然を撮り続けることになるのです。その思い出の島そのものが消えつつあるのです。温暖化で島が沈む、消えるというと、どちらかというと、ツバルなど海抜の低い、南方の島を想像しがちなのですが、こういう浸食による温暖化の影響もあります。

●タテゴトアザラシの赤ちゃん

北極圏近くに住むタテゴトアザラシは２月末から３月のはじめにかけて、結氷に合わせてその上で出産をします。アザラシの赤ちゃんは身長が90センチ、体重は10キロくらい。真っ白な毛におおわれた、可愛い赤ちゃんです。お母さんアザラシは２週間の間、つきっきりで世話をします。その間は食糧も取りにいけないので、１日に体重は３～５キロも減少します。一方、赤ちゃんアザラシはお母さんから濃いミルクを与えられ、１日に２キロも体重を増やしながら、成長していきます。

赤ちゃんアザラシは一応水には浮くけれど、あまり泳ぎは上手くありません。流氷の間を行ったり来たりすることが、ちょうどいい訓練になって少しずつ泳ぎを覚えていきます。同時に、白い毛が抜け、親と同じ身体の色に代わって、泳ぐのに適した身体に変わっていきます。そのための期間が必要で、氷があったからこそできていたのです。

ところが、ここ10年位、流氷の状態がおかしくなってきています。厚さが薄い、面積が狭い、そして、早く溶けてしまう。最初の内は、たまたま今年が特別なのかと思われていたその状態が、年を追うごとに顕著になってきました。カナダのセントローレンス湾では、２００２年に、75パーセントの赤ちゃんアザラシが死にました。そして今年（２００７年）、赤ちゃんアザラシが上手く泳げるようになる前に、すっかり流氷がなくなってしまい、赤ちゃんアザラシは全滅したのではと推測されています。

●汚染の進む両極

北極や南極と言えば、地球上で一番きれいな場所だとずっと思われてきましたが、北極上空で、１９７０年代から異変がおき始めました。春先になると、汚れた大気が上空にただようのです。それは、その時期に汚れた大気が風に乗って、運ばれてくるからです。その中に含まれる化学物資で、北極圏に住む生き物たちは、たとえば日本近海の生き物たちよりも汚染が進んでいるのです。

南極はごみの山に悩まされています。長年に渡って、各国の南極観測隊の残していったごみが、温暖化によって姿を現しているのです。海に魚を捕りに行ったペンギンは、巣に帰ろうとして、ワイヤーや鉄の塊を越えながら進み、怪我をすることも少なくありません。溶け出した氷河には亀裂が入り、そこに落っこちる危険もあります。温暖化によって、余計な危険が増えたことになります。１９９０年から２０００年の間に、南極半島の冬の気温は４・５度から５度も上昇しているといいます。環境は悪化の一途をたどっています。両極固有の動物達は日々生命の危険にさらされているのです。

○主な参考文献……『いま地球がたいへんだ』
石弘之著　草上文化

次号は「大地が乾く」です。

みどりの瓦版

編集／ニュースレター編集部 風岡 宗人
角出 貴彦

データで見る 環境市民

データファイル．8　「インターンの数」

環境市民にも毎年数人のインターンが来て、事務局スタッフ、ボランティアとともに活動を担っています。そして今年、インターン数が過去最多となりました（表参照）。

もともとインターンは「実習医」のことを指しましたが、最近ではボランティアが身近になるとともに就職活動にも有利とあって、様々な分野でインターン・ブームが起きているといっても過言ではありません。

環境市民では、昨年度までは損保ジャパン環境財団の「損保ジャパンCSOラーニング制度」や環境再生保全機構・地球環境基金の「インターンプログラム」、各大学・大学院からのインターンが主でしたが、今年度から独自のインターン制度を創設。「セミナー企画運営」、「広報」、「環境首都コンテスト」の3分野を募集し、一人が決まり現在現場で学んでいます。

今後もインターンの受け入れニーズが減ることはないと思われます。環境市民でもプロジェクトを担う一員としてしっかりした教育体制を構築していくことが必要です。

年度ごとのインターンの数（人）

2002年度	2
2003年度	2
2004年度	5
2005年度	4
2006年度	2
2007年度（予定含む）	6

環境市民＊法人会員さん紹介

環境市民の法人会員は現在12団体。毎月1団体ずつご紹介します。

職員研修の様子

第7回：株式会社 マンダム

環境推進室 室長 今川 正裕さん

当社が「環境市民」と関わりを持ったのはもう10年近く前になります。詰め替え用商品のデザインや環境配慮型商品のパンフレットについて、第三者の意見を聞こうと思い、麗澤大学の大橋先生にご紹介いただいたのがきっかけです。その後も新製品のデザインや環境対応に関するご意見を頂戴しようと、何度か京都の事務所にお邪魔しました。

当社では、設計・開発の基本原則のひとつに「環境保全への配慮がなされているか？」というのがあり、常に3R（Reduce、Reuse、Recycle）を意識した商品開発を心がけています。

また社員の環境意識向上を目的に、昨年は「環境市民」の枚本代表に講師をお願いして、当社の大阪本社に勤務する社員約70人を対象に環境啓発教育を実施しました。枚本代表の軽妙な語り口に、参加した社員全員が聞き入っておりました。

環境への取り組みとしましては、生産場面においては兵庫県神崎郡福崎町に工場があり、そこではISO14001を取得して環境マネジメントシステム（EMS）に基づく環境活動を実施しています。オフィスにおいては大阪本社、東京にある二つのオフィスで独自のEMSにより省エネ・省資源に取り組んでいます。

また昨年より神戸大学の石川教授が設立したNPO「Gomi-jp」に賛同し、「ゴミの減量化に向けた市民運動」「ECOアウトレット」などへの応援を実施しています。

マンダムのホームページ　http://www.mandom.co.jp/
環境への取り組み　http://www.mandom.co.jp/eco/index.html
（Gomi-jpのURL：http://www.gomi-jp.com/）

環境クイズ

五感と頭をフル活用！

Q. 地球は大気の層に包まれています。大気の中には地球を暖め、温暖化の原因物質でもある二酸化炭素、メタン、フロンなどの温室効果ガスが含まれています。もし地球上にこれらの温室効果ガスがまったくなくなったら地球の平均気温は何度になると推定されているでしょうか？

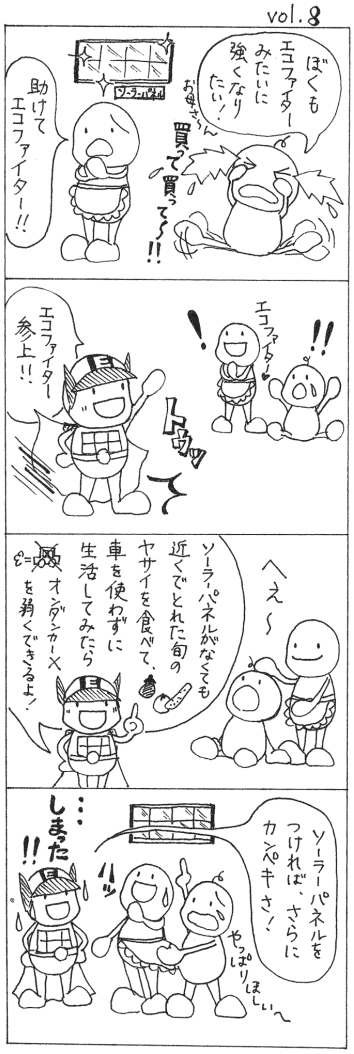
(A)　3度　(B)　-5度
(C)　-12度　(D)　-18度

※正解は次号でお知らせします。
クイズ正答者には、抽選でお一方に粗品を進呈します。解答、住所、氏名、電話番号を明記して下記までご応募ください。

7月クイズの解答 ……　④ 1/5

路地・夏秋収穫とハウス加温・冬春収穫のきゅうり1kgを生産するのに必要なエネルギー料はそれぞれ996kcalと5,054kcal（出典：（社）資源協会「家庭生活のライフサイクルエネルギー」）。また一般的に旬のものの方が栄養価も高く、味もよく、値段も安く一石三鳥です。

SKIPの！エコファイター劇場 vol.8



イラスト：かわみん
環境共育チームSKIPの環境プログラム「エコファイターショー」をモチーフとしています。

【みどりのお便り】
山口県在住の会員、亀井泰弘さんから7月号特集「ここが問題！ 安倍晋三首相『美しい星50』」についてご意見をいただきました。ありがとうございました。

新会員の方々・寄付　6月15日から7月13日

新会員
駒 ゆき香　西井 愛
角出 貴彦　橋元 輝
寺脇 俊　藤野 完二
ブックセンター名豊

寄付
樽井 雅美　村田 祐樹
藤井 千穂　松井 久見子
村田 譲　川那部 浩哉

ありがとうございました！

今月のありがとう！

目立たないところでも、お力を貸してくださった方々に、感謝をこめて―。

【ニュースレターの発送】
稲垣 光威／柿元 理世／窪井 千鶴子／島津 源紀／辻野 隆雄
伴仲 加江／東 広之／藤井 千穂／南村 多津恵／吉田 佳代

【総会のお手伝い】
北野 麻理子／長野 博美
（五十音順敬称略）

新入会員インタビュー

駒（こま） ゆき香さん（大阪府）
6月17日入会 ……

みどりのニュースレターの編集ボランティアをしています。総会で環境市民の活動をさらに知り感銘を受けたのが入会のきっかけです。今身近で世界で起こっている動きを知り、多くの人に真実や希望を伝えていきたいと考えています。

（ご意見・ご感想宛先）メール・FAX・郵送でお送りください
【E-mail】newsletter@kankyoshimin.org　**【FAX】**075-211-3531　**【HPから投稿】**http://kankyoshimin.u_me.jp/modules/ybb.s
【郵 送】〒604-0932 京都市中京区寺町通二条下ル 呉波ビル3階 NPO法人環境市民 みどりのニュースレター編集部 宛

1／環境市民

――かんきょうしみんぶんのいち――

環境市民の会員を紹介します

第26回

内田 洋子さん

7月に新たに環境市民の理事に就任した内田洋子さん。これまでの活動、これからの活動への意気込みとNPOのあり方をじっくり語っていただきました。

■様々な人との出会い

実にフットワークの軽い方である。必要な場所へなら、どこへでもすぐに飛んでいく。高知を拠点にアイデアや活動は全国規模。その人脈と人柄が何より重要かつ大きなファクターである。

内田さんが環境活動に目覚めたのは20年ほど前のこと。子どものアトピーの原因を知りたくて勉強していた時、高知市が実施している消費生活講座「くらしの学校」で食品添加物、そして「暮らし」が原因となる環境問題についてのレクチャーを受ける。

1978年、「くらしを見つめる会」を設立。主婦を中心に経済問題や廃油石けん作りや牛乳パックからの紙作りという運動を環境問題の啓発ワークに採り入れる活動をしていた。環境問題に関して言えば、「一部の人が共感している」時代だったと語る。

当時環境市民が発行した買い物ガイドについての新聞記事が目にとまる。これが環境市民との出会いだった。環境市民のリーダー養成講座を受講し、「くらしを見つめる会」10年目の活動として買い物ガイドをつくることとなった。枚本代表も講師として高知に招き、学習を重ねた。1997年、公募した30人の市民とともにお店の調査を行い、1998年に「かいものガイド高知」を発行した。このことがきっかけで、スーパーでレジ袋を断るための「バッグ不要カード」ができ、スーパーを巻き込んだマイバッグキャンペーンを実施した。そのときの買い物客へのアンケートによると、お店のイメージは下がるどころか、むしろ上がっていた。「かいものガイド」のおかげで、高知の消費者には「消費」を「環境」に結びつけるエコマインドが浸透していたのだ。

八面六臂の内田さん。その他にも多彩な活動を展開する。1997年のCOP3のとき、高知サイクリング協会と消防署と協働で「列島縦断エコリレー」を実施。代表を務める「アースデイズ高知」では、毎年市民向けのワークショップやラテンアメリカの民族音楽を奏でるフォルクローレグループをニューヨークから呼んでイベントなどを開催している。また、理事を務めていた高知県環境活動支援センターでは「風土を活かした省エネの住まい方」をコンセプトとして、市民向けのワークショップや暮らし方を提案する冊子を作成し、今年度は工務店向けに提案活動をしたいとはりきる。また、今年6月には「100万人のキャンドルナイト」に合わせ、高知にある文化施設に300個のキャンドルを並べて「キャンドルナイト」を開催した。内田さんのパワフルさに引き寄せられるのか、周りの人々集まってくるから不思議だ。

環境市民では、グリーンコンシューマー活動をじっくりと広げていきたい。

■市民と行政の間に

1998年の高知豪雨の際、被災復興支援のベースキャンプでボランティアと被災者をつなげるコーディネーター役を務める。この経験がきっかけとなり、市民活動を支援する中間支援組織の必要性を実感。1999年、青年会議所OBや福祉・環境団体が主体となって「NPO高知市民会議」が設立される。内田さんはその設立呼びかけ人の一人となり、現在まで役員を務めている。この団体が運営を行う「高知市市民活動サポートセンター」の事務局長を5年余り務め、「行政とNPOとの協働」や市民活動を推進する事業を多数実施した。また環境首都コンテスト全国ネットワーク（主幹事：環境市民）主催の「日本の環境首都コンテスト」では「住民のエンパワーメントとパートナーシップ」の採点という大変な作業も担う。6年間採点担当を続ける中で、自治体の取り組みに変化が見え始めた。住民と自治体の新たな関係づくりが始まろうとしていると感じている。

「環境市民では、環境と経済の仕組みを変え、主体的な市民を育むグリーンコンシューマー活動をじっくりと広げていきたい」。優しい笑顔と、強いまなざしが印象的だった。

（※1）全国80のスーパー、生協、コンビニの環境対策をチェックしたガイド。小学館発行。

（聞き手／駒 ゆき香、撮影／千葉 有紀子）

編集部（五十音順）

有川 真理子　乾 孝史　角出 貴彦
駒 ゆき香　久保 友美　島津 源紀
田麦 誠　千葉 有紀子　東 広之
藤岡 洋貴　松澤 京子　安江 晃子
吉田 佳代
下司 智子（デザイン・レイアウト）

編集後記

初めてニュースレターの記事を書くことなり、記事を書く過程で文字を通じて「人に伝える」ことの難しさを感じた。編集員の皆が紙媒体という制約の下で、常にどうやったらうまく伝わるかを苦心しているから、現在のニュースレターがあるのだと思う。今後そういう姿勢を学んでいきたい。　（ニュースレター編集部　東 広之）

次号予告

みどりのニュースレター No.172 2007年9月号

現在編集中！

特集：環境市民が考える企業とのパートナーシップとは？（仮）

地球温暖化を防止するためには、行政だけではなく、企業とのパートナーシップも重要です。

行政とのパートナーシップとは、また一味違う企業とのパートナーシップ。8月号に引き続き、事例紹介や鼎談を通して、環境市民が考えるパートナーシップ像を特集します。

あと少し！

環境市民オリジナルエコバッグ

環境市民を持って歩こう♪

環境市民がオリジナルで作成したエコバッグが残りわずかとなってきました。会員の皆さん、環境市民ファンの皆さんでまだ購入されていない方はお早めに事務局までお申し込みください。なお、収益は環境市民の活動に使わせていただきます。

だから環境市民のエコバッグ！

● 再生ペットではなく綿 100% の自然素材を選びました。

● 国内での縫製とプリント

多くの布製品が、安価な労働力を理由に中国をはじめとするアジア諸国で作られています。環境市民では、国内の技術でつくることで輸送にかかるエネルギー削減や国内産業や技術を大切にしたいという想いから、国内縫製で行いました。縫製、印刷は、京都市内にある心身障害者作業所リンデン（京都市北区）に依頼しました。

● 持ち手がすこし長めの 60cm

買い物をして肩から下げる時、肩ぐりに余裕があります。男性にも持ちやすいデザイン。

● デザインは、アレックス・ボーイズさん（米国　環境デザイナー）

環境市民が提案し、京都市内で95年から8年間運行した環境メッセージ列車「エコモーション」（運行：叡山電鉄株式会社）の車体をデザインしたアレックス・ボーイズさんによるデザインです。よくみると、形を切り抜いた部分も捨てることなく、無駄なくデザインに取り込まれています。

● たたんで小さく。いつもバッグに。

仕事帰りや外出のついでに使っていただけるよう、折りたたんで小さくなるタイプにしました。

■サイズ　：横 32cm ×縦 35cm　マチ（底のみ）7.5cm
■価　格　：1,000 円（税込）郵送の場合は、別途送料をいただきます。
■申込み方法：メール・ファックス・お電話で、お名前・ご住所・電話番号・購入枚数を京都事務局までお知らせください。
■お届け　：商品のお届けまでに、1 ～ 2 週間を頂戴します。
■お支払い　：商品到着後、商品に同封の郵便振替用紙にて代金と送料をお振込みください。

環境市民に入会しよう！

環境市民は、多くのボランティアと会員の皆さんの参加によって支えられています。
「持続可能で豊かな社会づくり」のために、ぜひ会員になって環境市民の活動を応援してください！

会員特典

□月刊会報誌「みどりのニュースレター」をお届けいたします。
□行事などの参加費を割引させていただきます。
□会員専用ブログ「ボランティア広場」への参加ができます。
□環境に関する様々な情報を得たり、また質問や相談ができます。

会費の振込み方法

(1)　郵便振替振込用紙に、住所・氏名・電話番号・会員の種類・送金内容事項をご記入の上、「年会費＋入会金」をご入金ください。（※シニア・学生・助成・特別助成会員は入会金不要）

(2)　ご入金を確認後、最新のニュースレターと会員バッジ、入会記念としてポストカードをお届けします。

会費

種別	年会費	入会金
個人会員	4,000円	1,000円
ペア会員	6,000円	2,000円
シニア・学生会員	3,000円	―
ファミリー会員	8,000円	2,000円
助成会員	10,000円	―
特別助成会員	50,000円	―
終身会員	一括　80,000 円	
営利法人会員 *	1口 50,000 円	50,000円
非営利法人会員 *	1口 10,000 円	2,000円

*年会費は一口以上

～あなたのご支援が環境市民を支えます～

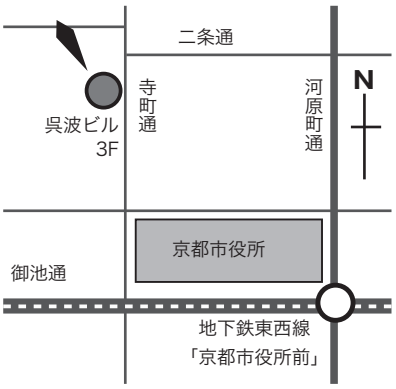
♥ **寄付をする…**　住所・氏名・電話番号・寄付金額をご明記の上、下記の振込先へお振り込みください。

会費・寄付のお振込み先　【郵便振替】口座番号：01020-7-76578　加入者名：環境市民

（発行）　**特定非営利活動法人　環境市民**　（代表）枚本 育生　（発行人）堀 孝弘
【TEL】075-211-3521【IP 電話】050-3581-7492【FAX】075-211-3531
【E-mail】life@kankyoshimin.org【URL】http://www.kankyoshimin.org
〒 604-0932 京都市中京区寺町通二条下ル呉波ビル 3 階　（月から金　午前 10:00 から午後 6:00）

環境市民 東海事務所
【TEL&FAX】052-521-0095【IP 電話】050-3604-6182
【E-mail】tokai@kankyoshimin.org【URL】http://www.kankyoshimin.org /tokai/
〒 451-0062　名古屋市西区花の木 1-12-12　AOI ビル 4 階

環境市民 滋賀事務所
【TEL】077-522-5837【E-mail】cefshiga@kankyoshimin.org
〒 520-0046　大津市長等 2 丁目 9-12　竺 文彦気付



本誌の無断複写・複製・転載を禁じます。
「環境市民」　登録商標 第4809505号

この印刷物は風力発電による自然エネルギーを使用して古紙配合率100%再生紙に、大豆油インキで印刷しました。
印刷：（有）紀書房

環境市民
Citizens Environmental Foundation
21 世紀
地球を、地域を、生活を、
持続可能な豊かさに